

コースプランニング舞台裏

人材難なのは分かっている。だが、オリエンテーリングの運営でもっとも楽しく、また実りのあるコースプランナーは是非韓国人の手で行なってほしい。そう思ってプランニングのための講習会の講師を名乗りでたが、いつの間にかロングとリレーのプランニング担当になっていた。

6月末に訪韓した時、これは本当にできるのだろうか？ IOF の地域選手権の一翼を担う第一回アジア選手権にふさわしい大会になるのだろうかという疑問に包まれて帰国した。ロングは地図も完成し、コースプランナーとしての仕事をほぼ終えることができた。一方リレーのコースの地図は 1/2 しか調査・作図が終わっていないかった。

数日後に完成した地図が送られてきた。よく調査されていた。しかし表記上の IOF ルールの無視、縮尺の適当な設定、沢で表現すべき地形をみぞで表現しているなど、逸脱の嵐だった。実際に入ってみると、それなりに走れると思ったところも全てライトグリーンで表現されていた。尾上さんと山川の連携で、等高線の間引きなどという机上ではできないはずの作業まで終えて、地図はテープ巻きを兼ねた修正を残すだけの状態まで仕上がった。

「地獄」の日々

地獄の日々、漠然とそう思って 7 月 24 日に韓国に向けて出発した。25 日と 26 日半日は、地図調査に費やした。その二日間はほとんどの時間雨が降った。

リレーの前々日に、朝 4 時までかかって作図を終えた。リレー前日のミドルは会場にはいかず、ホテルに籠もってコースとそのファイルをいじり続けた。夕方になってようやく全てのコース版が出来、尾上さんの検版を受け、印刷が始まった。印刷枚数は約 300 枚。1 枚 2 分、2 台のプリンターでも、5 時間はかかる。

作業は少しづつ進んでいったが、23 時を過ぎるころ恐ろしいことが発覚した。約 200 枚の地図印刷を残した段階で、残っている地図用紙が 100 枚しかないのだ。

隣の資材部屋を漁った。KTO (韓国観光公社：韓国連盟の事務所がある) にあるのではないかと、どこかに紛れているのではないかと、様々な可能性を検討した。万が一に備えて予備の印刷用紙を寺島氏がスーパーに買いに行くこと

にした。その間、僕と尾上さんは、まず各コース 3 枚ほどあった予備地図の枚数を減らすことにした。その後、資材部屋に A3 の用紙や B4 の用紙が残っているのが発見された。A3 は半分、B4 からは A4 が切り出せる。それで都合 100 枚以上が確保できた。「80 日間世界一周」で、期限に間に合わせるためスピードを出しすぎて燃料がなくなってしまった蒸気船を動かし続けるため、最後の手段として主人公である英国貴族がその船を買い取って、甲板や舷の板まで全部燃やさせ、最後に英国紳士の象徴である傘を投げ込むシーンを思い出した。その時、地図作成の責任者である安さんが、車に積んであった資材の山から、300 枚の地図の山を発見した。



リレー前日、土壇場で見つかった印刷用紙 300 枚に喜ぶ尾上氏。

地図印刷作業の裏で、的場氏は淡々と成績処理の作業を続けていた。ミドルのスタートは順調だったが、ただ一つ不幸だったことは、エリートのスタートに配置されたスタートユニットの中に、一般ユニットが紛れ込んでいたのだ。そのため、会場で成績が確定できなかったのだ。

パンチングフィニッシュと読み取りの間の時間および読み取りのコンピュータに残された読み取り時刻からフィニッシュ時刻は分かる。問題は、読み取りが二つの PC で行なわれ、その内部時計が 8 秒ずれていたことだった。的場氏はログから問題の E カードがどちらで読み取られたかを丹念に拾い出し、正しいフィニッシュ時刻を確定させた。こうして無事男子の成績が確定し、高橋の 3 冠が決まった。作業終了は 24 時を回っていた。氏が当日中に成績を確定できなかったのは「記録」だそうだ。

その作業をしながら、せっかくの正式な地域選手権なのだから国旗の掲揚と国家の演奏をしたいねということになった。的場氏はネットから国歌の mp3

ファイルをダウンロードし、なぜか持っていた式典用のファンファーレまで加えたフォルダを作ってくれた。翌日は韓国の運営者もその気になって、ボランティアの女の子たちに、旗揚げの練習をさせて、なんとか選手権らしい表彰式が行なえた。日本第一チームでリレーのアンカーとして見事にリードを守った宮本知江子は、表彰式の後、「私が死んだ時には、(当日メダルの代わりに渡された)クリスタルの楯を棺桶と一緒にに入れてほしい」と語ったという。

地図印刷は、ほぼ計算通りの 3 時 1 分に終わった。並行して行なっていたシーリングも 4 時前には終わった。

最後の修羅場

運営を手伝ってくれたオーストラリアのマルコムが、リレー前々日のコントロール設置の時、「テープが見つからない」と言っていたコントロールがあった。当日の朝、そのコントロールに行ってみると、自分が思っているとは別の場所についていた。様々な不幸が重なり、地図は不正確な状態で当日の朝まで放置されていたのだ。

マルコムが置いた位置に残っていた黄色のテープを巻き、正しい位置にフラッグを設置しなおし、可能な善後策を考えた。その後、パンチ台はあるのにフラッグがないコントロールを見つけたが、そんなことはもはや些細なトラブルに過ぎなかった。問題のコントロールについては、正直に選手に情報を提供しようと思った。「59 番コントロールの北方の地形表現には正確さを欠くところがある。正しい場所にいると思っているのに黄色いテープを発見したら、そこは実際のコントロールの北方である」という文を用意したら、ジュリーのパトリックが訂正のアドバイスをくれた。

会場では、地図の仕分けにトラブルしていた。スタート 30 分前だが、デモンストレーションの打ち合わせの時間もない。この時点でスタートを 15 分遅らせる決定をした。スタート直前は戦場だった。救いだったのは、最初のスタートであるエリートが MWE 併せて 15 チームしかいなかったことだ。残った二つのスタートもぎりぎり、時間通り(15 分遅れ)でスタートさせることができた。第一の修羅場は乗り切った。

地図交換でも、トラブルは続出した。作っていたはずの予備地図はエリートしか見つからず、地図取り間違えは許されない状況だった。僕と尾上さんも含めた日本人4名と韓国の主要スタッフとボランティア4名という例外的な手厚い配置で、取り間違えを絶対させないように配慮した。新たに編成されたチームの情報が出ていなかったの、バカントの地図が並べられていなかった。そのため、地図が見つからずに2分間立ち往生させるチームも出てしまった。スタート時には小雨だった雨は、2走出走時には豪雨になった。

地図配布所の混乱が収束したので、フィニッシュに向かった。フィニッシュでアナウンスに配置されていたイさんは有能な女性で、慣れないアナウンスを適切にこなしていたが、経験がないので先行的アナウンスができない。それを補いながら、しばらくフィニッシュのアナウンスを手伝った。フィニッシュでは、その間も、的場先生らしからぬミスで、一時全員が失格になったり、多国語でのクレームなど、大変な状態が続いたが、それも一段落した。

ご褒美

運営全体が落ち着いてきたころ、雨もあがった。男子は2走時点での競り合いを制して中国が、女子はエース番場を欠いたもののベテラン宮本が安定して走り、日本が小差を制した。

表彰式は予定通りの時刻に始まった。国際大会で日の丸があがり、君が代が流れる。世界選手権で表彰式を見るたびに、「いつかは・・・」と思い続けてきたことが、アジア選手権という小さな舞台ではあるが、現実のものとなった。選手にとってはもちろん、日本の一オリエンティアとして、想像していた以上に感動的な場面だった。

眠くてバンケットどころじゃないだろうと思っていたが、帰りのバスで爆睡したら、元気になった。参加国の代表に一言づつ挨拶させるといふ安直な趣向も、各国ノリノリで意外と面白かった。バンケットの合間に大会中に取り残されたビデオと写真が流された。IOFを代表して参加していた副会長のヒュー・カメロンも、「これまで参加したどのバンケットよりもよかった」と手放しの誉めようだった。また、IOFの理事を退任する僕や、新しいアジアの理事として選出された韓国のリー氏、アジア会議の議長香港の李氏、トレイル0の発展に尽くした小山氏を「アジアの顔」として紹介してくれた。アジア選手権によってアジアが自立への第一歩を踏み出したことが、副会長としても、

個人としても嬉しかったに違いない。

バンケットの後は、この3年間の念願であったコリアン・バーベキューに若い選手たちを連れて出かけた。ちなみに帰国後体重を量ると1kg落ちていた。多くの日本人運営者がたった一週間で3kgほどの「ダイエット」に成功したようだ。

大会前、「地獄の日々」と思いながら韓国に向かったが、どこかで「地獄」を垣間見てみたい誘惑にも駆られていた。2007年のウクライナでの世界選手権が終わった時、セクレタリーのジュリアから参加者全員に送られてきたメールにねぎらいの返信を出したら、「今でも、時々大会の時の夢を見るの。ゼッケンがないわ。地図はどこにいったの？驚いて飛び起きるの。でも、心のどこかで、みなさんの要望に応えようとして働いた戦場のような日々を懐かしむ気持ちもあるのよ」という返事が戻ってきた。世界選手権は世界一の選手を決める場であると同時に、運営者にとっても世界一の大会を提供する重圧がある。その過酷な日々を乗り切ったからこそ味わえる充実感や達成感を、今度は言葉もオリエンテリング文化も違うアウェー戦で味わってみたかった。

熟練者は地図に描かれていない「行間」を読み取ることができるという自分の研究の話をしたら、メディア心理学を専門とする同級生が、「映画にも行間を読むシーンがあるんですよ」といってある動画を見せてくれた。男が荒野の道標の前で、逡巡している。道標の一方は「Hell(地獄)」と描かれており、もう一方は「Heaven(天国)」と書かれていた。画面は、その男が一本の道標を担いで、選んだ道を歩き始めるアップとなる。道標には「Heaven」と書かれている。その男に対する軽い失望が頭をかすめた瞬間、画面は引いて、その男と残った道標が映し出される。道標の文字は読めない。しかし、彼は残っている道標の示す方向に進んでいたのだ。

今回、僕たち支援チームは、アウェー戦を引き分けに持ち込むのが精一杯だった。大きなミスはなかったが、トラブルはいくつもあった。韓国の運営チームとの絆は生まれつつあったが、完全なものには至らなかった。この大会は(無事あるいは自分たちが倒れる前に)終わるのだろうか、大会前半は何度も思った。この引き分けに誇るものがあるとするれば、最後までゲームを諦めなかったこと。そして「地獄の日々」を「天国」に変えようと常に行動し続けたことだ。リレーの前々日、

あまりの仕事の多さにすでに破綻していたチャさんは、リレーのナンバービブの注文を忘れていた。「私、絶対憶えていられないと思うので、あした朝言ってください。」それなら参加者から言ってもらった方がいいだろう、公式掲示板にチャさんの顔写真を貼りだそう。「この顔にピンときたら、『リレーのビブは注文したか?』と聞いてください」と書いて張り出した。リレーのビブは前日の夜に無事届けられた。リレー表彰式の国旗・国歌プロジェクトもそんな遊び心の反映だった。



「この顔にピンと来たら...」(本文参照) 車(チャ)さんは、韓国運営陣の中心であらゆる仕事をこなす一方で、僕ら支援チームと韓国のかげがえのない架け橋となった。

約10年間、IOFの理事として、あるいは個々の国際大会の運営者として、時に過酷な日々を送り続けた。アジアの自立の第一歩を感じさせたバンケット、そしてこの10年の労をねぎらってくれたヒュー・カメロンのスピーチは、その過酷な日々を多くを幸福に変えてくれた。また新たな立場で、ここに集う人々と関わっていけるのだと思うと、この3年間感じたことのないハイな気分になった。

(村越 真)



レストデーには、日本や中国のトップ選手によるジュニアワークショップが行なわれた。写真はアジア各国のジュニアの前で講演する高橋選手。